

# 熱海市伊豆山 ささえ逢いセンター 活動報告

発災直後の避難所体制から継続して、社会福祉協議会と市が協力して運営してきました。市の各部署の保健師が週替わりで活動に参加し、相談員（6名体制）と一緒に訪問活動をしたり、カンファレンスを実施しています。また生活再建に向けた重要なフェーズでは、まちづくり課との同行訪問や、弁護士会との事例検討会等も実施してきました。被災世帯は見守り区分と生活再建区分で分類し、長期的に被災世帯の再建を支援しています。

## ささえ逢いセンターの開設当初の活動と目指す目標

仮設住宅その他避難生活を送る被災者が、安心して避難生活が送れるように、繰り返し訪問相談支援。

訪問後、アセスメントを行い見守り区分を確定。

支援で把握した課題やニーズは、関係機関につなぎ、できるだけ速やかに世帯に返す。解決できないニーズについては事業等を検討、市関係部署に共有することで改善を促す。

- ・被災後に失業した方や外国人の方からの相談
  - ➔就業支援、国際交流協会の紹介など
- ・復興計画検討委員会の情報不足に対する不満
  - ➔個別通知で委員会情報が被災世帯に届くようになる
- ・気軽に集える居場所の要望 ➔農協を活用した居場所
- ・一人暮らしの高齢者世帯 ➔担当ケアマネジャーと連携

# 【見守り支援事業・伊豆山ささえ逢いセンター 被災者支援の現状】

複雑化する悩み

個別支援

多機関協働

相反する思い

また災害があったら怖い  
伊豆山には帰りたい  
仲の良かった地域の人には帰らないと言っている  
家族は気持ちがバラバラ

経済的な課題

決めることの多さ



繰り返し訪問

世帯員それぞれの気持ちを傾聴

ケースカンファレンス



地域の町内会や民生委員、保健所等支援機関に相談

みなし仮設の担当課に現状を相談

弁護士会との支援協議

居場所・地域づくり



# 1・訪問活動初期

- 開設当初は、避難ホテルでの基本情報が役立ち、参考にしていた。
- 自分には何ができるのか、何をすれば役立つのか、面識のない被災者とどうコミュニケーションを取り、信頼関係を築いていくのか、そのプロセスが大変だった。
- ささえ逢いセンターを理解されていない、理解されているが私達ではどうにもならない話だと拒否される、「あんたらがきたって何になる。若い人も亡くなった。あの時自分が死んでしまえばよかった」と心に刺さる言葉を言われることもあった。
- 一人一人状況や悩みが全く違うため、気持ちに配慮し個別の対応（世帯内でも）を心がける必要があった。
- 訪問時、被災された方から聞かれた事にその場で答える事ができず悩んだ。
- 持ち帰った質問はすぐに関係部署に確認し、わかり次第連絡するようにした。
- ニュース、新聞などを毎日チェックした。
- 元々個人や家族が抱えてきた課題が被災を機に深刻化してきたことがあった。
- 人災ではないかという側面が被災者の心に大きく影響し、怒りの感情が立ち直りに対し大きな壁となり、生活再建を難しくしている中での配慮が求められた。
- 相談員としては、そのやるせない気持ちに浸り過ぎないように心がけた。

## ささえ逢いセンターの活動と **目指す目標**

仮設での生活が安定する一方で、数年後の生活再建に向けた悩みや迷いが多くなっている。**127世帯**すべてが、悩みつつも前を向き、生活再建できるよう、寄り添う支援を行う。

- ・ 支援区分**AB**の世帯すべての支援計画を策定、関係各所とのケアカンファレンスを進める。
- ・ 避難生活の支援区分**ABCD**でのみ世帯を分類していたが、令和4年6月からそれに加えて生活再建区分**1234**を追加し、各世帯が生活再建がどこまで進んでいるか、いまの課題（経済的、家族関係旧住家など）を整理、市の担当部署と共有、生活再建の為の制度利用など、世帯のペースで支援する。

# ソーシャルサポートネットワーク分析マップの作成

2 「ネットワーク分析マップ」の様式と使用方法  
 ソーシャルサポート・ネットワーク分析マップ様式

作成日 年 月 日

「家族」 「地域」  
 「友人・知人」 「公的資源」

役割分析

必要な支援 (意思決定支援)	誰が(社会的存在)	引き受けている・期待されている役割

\*河野聖夫氏の許諾の下に、一部改変の上で使用している

2 「ネットワーク分析マップ」の様式と使用方法  
 ソーシャルサポート・ネットワーク分析マップ様式

作成日 年 月 日

「家族」 「地域」  
 「友人・知人」 「公的資源」

役割分析

必要な支援 (意思決定支援)	誰が(社会的存在)	引き受けている・期待されている役割

\*河野聖夫氏の許諾の下に、一部改変の上で使用している

2 「ネットワーク分析マップ」の様式と使用方法  
 ソーシャルサポート・ネットワーク分析マップ様式

作成日 年 月 日

「家族」 「地域」  
 「友人・知人」 「公的資源」

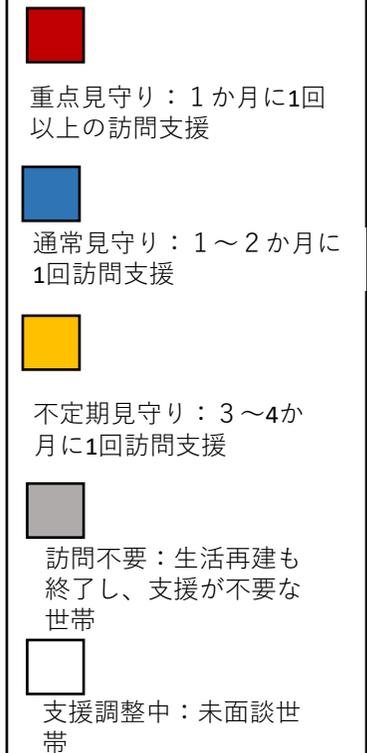
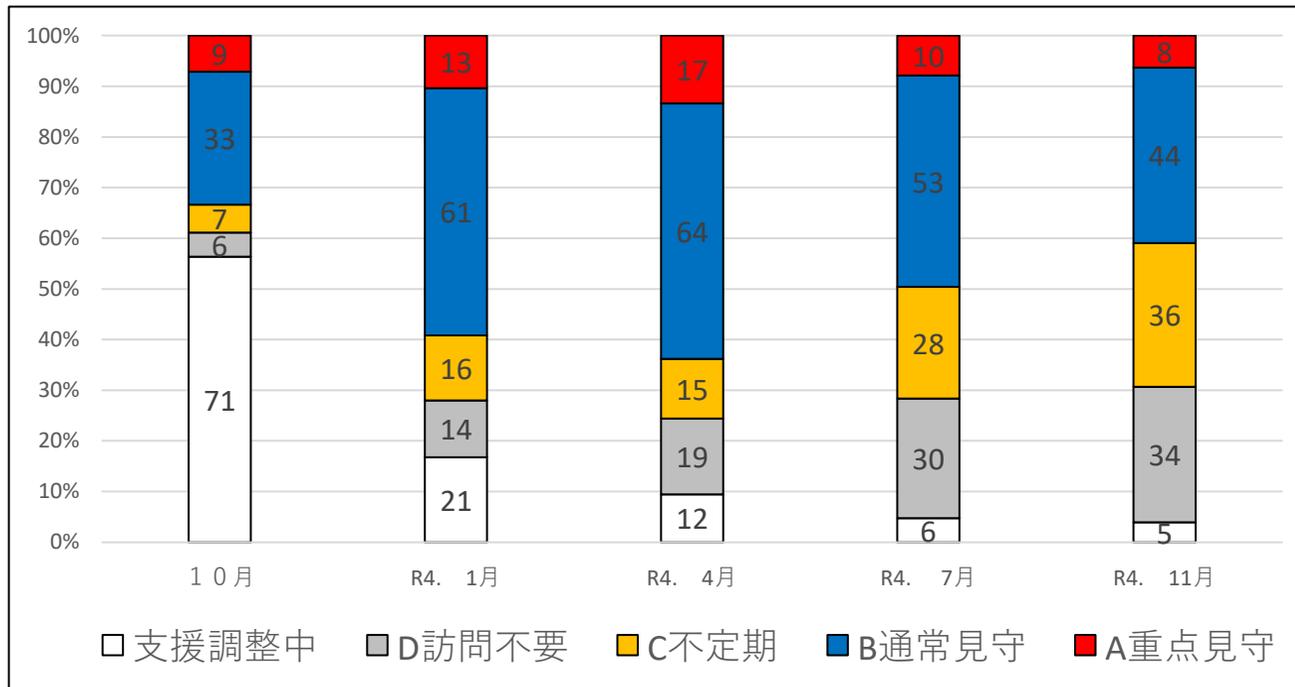
役割分析

必要な支援 (意思決定支援)	誰が(社会的存在)	引き受けている・期待されている役割

\*河野聖夫氏の許諾の下に、一部改変の上で使用している

# 【伊豆山ささえ逢いセンター対象世帯区分の変遷】

## 見守り区分の推移（対象世帯127世帯）



センター開設から1年が経過。スタートからおおよそ3か月で訪問を希望している世帯にはひととおり面談が終了。半年後の令和4年4月時点で重点見守りが最も多く17人Bも64人となる。その後少しずつAとBが区分変更となりました。

## 2. 1年を経過して

- 個人の力ではどうすることもできない問題が山積みで無力さを感じることもある。
- 今後の帰還に向けての問題や対応に不安を感じる。
- 家族を亡くす等、人災で苦しんでいる人達の心のケアが難しい。
- 訪問がスムーズにいかない、連絡しても会えていない等、これからどうアクションを起こすのか、また個人情報共有の同意書が取れていない方もおり今後の方向性に悩んでいる。
- 被災された方の住まいや日々の生活の継続が厳しい局面や、選択の時期に入っていくなか、センターの活動が有限であると感じる。
- 活動終了を見据え、今ある課題が達成したようでも見逃しはないか、再建区分変更について悩むことがある。
- 被災された方の課題を考えるためには、物事を多角的に捉え、社会問題、行政組織、経済、家族倫理、高齢者問題など、広い視野と知識が必要である。

# 被災者への支援→平時施策への移行

【健康・医療】

平時の施策

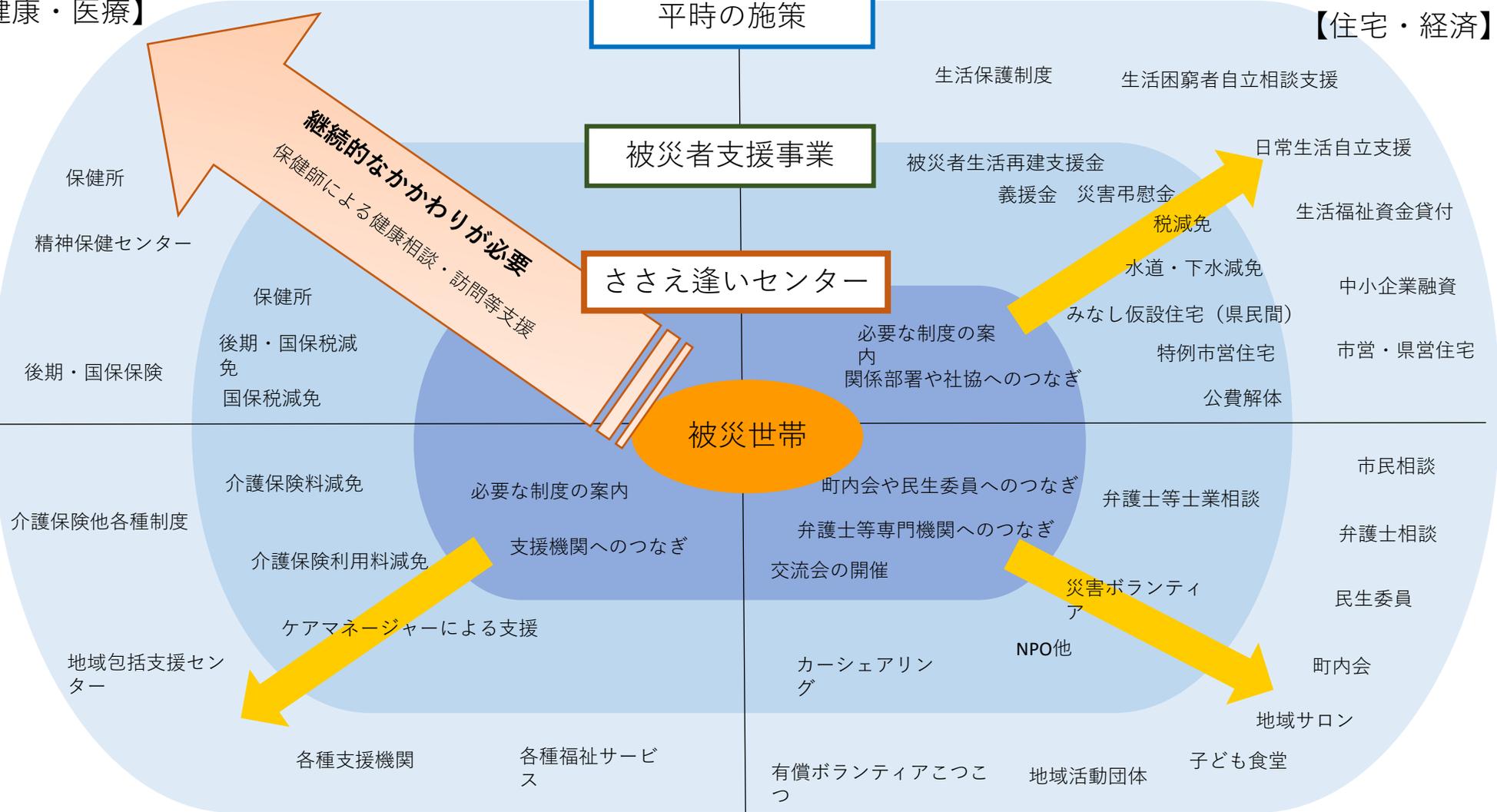
【住宅・経済】

被災者支援事業

ささえ逢いセンター

被災世帯

継続的なかわりが必要  
保健師による健康相談・訪問等支援



保健所  
精神保健センター  
後期・国保保険  
国保税減免

介護保険他各種制度  
介護保険料減免  
介護保険利用料減免  
ケアマネージャーによる支援  
地域包括支援センター

【介護・福祉】

生活保護制度  
被災者生活再建支援金  
義援金 災害弔慰金  
税減免  
水道・下水減免  
みなし仮設住宅（県民間）  
特例市営住宅  
公費解体

日常生活自立支援  
生活福祉資金貸付  
中小企業融資  
市営・県営住宅  
市民相談  
弁護士等士業相談  
弁護士相談  
民生委員  
町内会  
地域サロン  
子ども食堂

【地域・その他】

各種支援機関  
各種福祉サービス

有償ボランティアこつこつ  
カーシェアリング  
NPO他  
地域活動団体

# 5. 活動を通して有効と感じたこと

## 1. 段階に合わせた研修会の実施

アニバーサリー反応、悲観の段階などを知り、被災された方の多様性を考えながら訪問できた。

ソーシャルサポートネットワークを用いて、被災者の全体像や情報整理を行い、客観的に対象の方々を捉えることで次の行動に繋がり、全体での情報共有にも役に立った。

## 2. 月1回の相談員だけの話し合いの場

普段、会う機会の少ない相談員達と活動での疑問や悩み、問題について話し合い、様々なことを共有することが、支援者支援にも繋がっていた。

## 3. 毎日の朝礼・夕礼

その日のうちに思いや悩みをはき出し、早期への解決に繋げ、気持ちを家に持ち帰らないようにした。

## 4. 2人での訪問

ひとりで問題を抱えずに訪問できている。

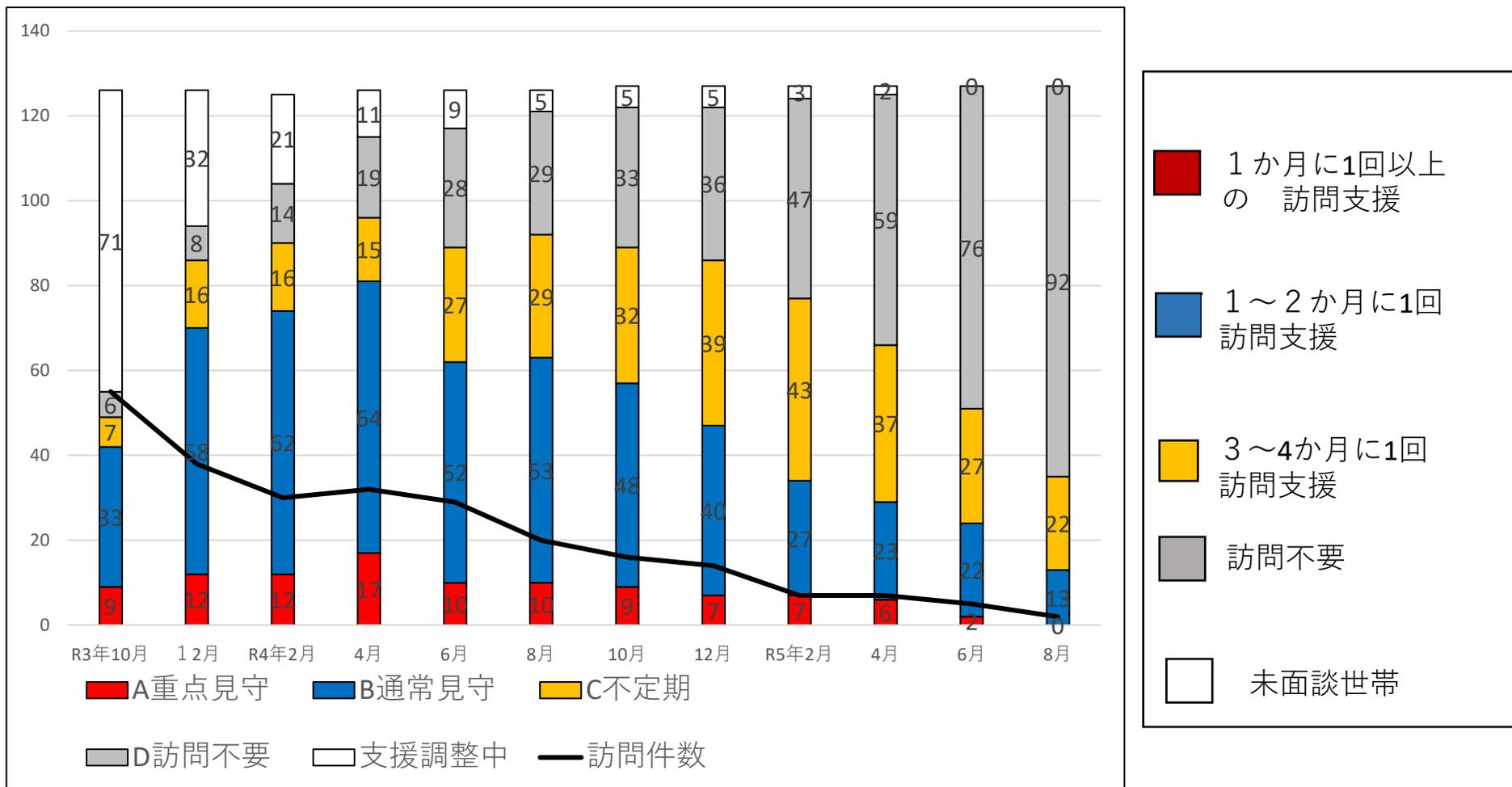
訪問時、言動の裏側にある気持ちを2人で訪問することで確認できた。

# 地域の拠点活動（旧農協跡地：いずさんっち）



# 【伊豆山ささえ逢いセンターの見守り区分】

## 見守り区分の推移（対象世帯127世帯）



# ささえ逢いセンターと重層体制イメージ (R4)

ささえ逢いセンターは、訪問等見守りのほか、住宅再建支援なども検討していく。また、被災者の交流や地域とのつながりの場として、拠点整備も進めていく。

重層事業は、改めて移行準備として、部内の連携や関係機関との包括的な体制づくりと、マニュアルや計画策定、予算編成事務などを進める。ささえ逢いセンターとも連携し、複雑化・複合化した相談について、多機関協働事業などで対応する。

